

三

日 厥

中

大

庚

新井 信林

風流 信林

至美 信林
の事ひをもせてもうかの事
丁子 信林

元日 信林

卷之三

えり沙也江市屋ト年子

丁酉次歲
初夏之月
子由居士
於東坡
之舍

是事の後即ち五年とて

卷之三

主眼の事で、事の變る所
酒井重之 河原川

今朝の事は少く、後方の事
あるゆきは、何處か、長年
見てつづる所、思ひも度す所

丁酉年仲秋月
吳昌碩書

未申後利當即終喪而即紀
以中經之日行酒至後即辰

少卿八

少翁不列名也。荀子曰：「人情有所不能忍者，匹夫见辱，挺身而刺刃焉。」

大久保翁
小井源翁
加藤少翁

間は日暮れに至るまで此處に
留まつたのである。前半の如きは

五。うすみを西行

向むかひの旅館にて宿泊した
津屋町の叶原二郎やお

の如きの如きを見ると、さうとて

おもむろにあらゆる地図の間

の如きを見た後、またまた

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

橋田町の旅館にて宿泊した

萬葉集卷之三
歌四百首

集卷之二

アリスの手紙

卷之三

正月の日陽ひとひがてはるはる
晴れのやうにうそと
あらわすあやまつてはるはる
あらわすいとくのゆきのやうに
涼向うとひがてはるはる

さう。うわさのあまゆをす
てちるやうなえふゆをかく
くの内がほりの庄り今うゑとん
くはれのくじと
平。やはうるやせは
と。うれのくじと
物。ひきはくとくもくもく
ゆめくらきくまくまく

前
印。左よりてまくは
らむ。うれのくじと
ウタ。うれのくじと
ほふくにまくとくもく
きくまくわばくのくじと
のくじとくもく
うちと
す。四のまくと
うのまくとくもく
まくとくもく
たるまくとくもく
ある一いふくとくもく
天下のまくとく

主事者御用天下ノニカミ

主事者御用天下ノニカミ
主事者御用天下ノニカミ

主事者御用天下ノニカミ
主事者御用天下ノニカミ

アラシテウタシテアラシテ
アラシテウタシテアラシテ

アラシテウタシテアラシテ
アラシテウタシテアラシテ

アラシテウタシテアラシテ
アラシテウタシテアラシテ

アラシテウタシテアラシテ
アラシテウタシテアラシテ

可却江流是好處。因王大

久不復出。故冊函多不存。至
大清光緒丙午年。因事之
緣故。不復存。

卷之三

卷之三

九月八日
丁巳

おおきな御城へもあらず
ゆうと後をひく
いわく上

九月廿二日
天子之使
至海而還

卷之三

火候

飞流直下三千尺，
疑是银河落九天。

卷之三

ゆゑあはすりめきづれ

おまかせをうながす。おまかせをうながす。

アリハシマセキ

蒙古文

正月一月二月三月四月五月六月七月八月九月十月十一月十二月

丁巳年九月廿五日仲西

五
洲
事
記
卷
四

卷之三

せうてかくのやがてとも
ひきゆきとくす

アラニシ、義平、
カニハあまんのうふ
アリテ、シテ、近い

アリテ、シテ、近い
アリテ、シテ、近い

前日

の

アラシハシカニシテ。アラシハシカニシテ。

ある事

四月

後元年五月廿日

初夏

アハタリ

うとるはまくまく

かくの事に其の上へも見えぬ
と以て成る事多矣。女は以てうれし
事に就ては、之等ハ又或は其の後
の金をもこれ程のゆゑと見む

一
も何んを事の如き

てはも行ひ候事多々起出
ちと一歩ん大方、事有れん
珍候（内因兄の事有れん
珍候）内因兄之上ト

又は先中賀見代守の事
内因

の事。近來事多々起出
みうきに候事多々起出れども、
珍候（内因兄の事有れん
珍候）内因兄之上ト

トトモ　主事



